

船のお仕事体験談！

練習船のここだけの話 Vol.7

練習船の魅力と魔力

1. 水産大学校への入学

私は青森県で生まれ、漁業を営む父と調査船の機関長だった祖父の影響を受けて育ちました。実家の近くに漁港があり、そこで見た漁船の操船に興味を抱いたことが船乗りを目指すきっかけになりました。その後、普通高校を経て水産大学校に入学します。水産大学校では寮生活とクラブ活動中心の生活でした。特に当時の寮は上下関係も厳しいことから、時には厳しく、時には優しい先輩の存在が社会人として自立する知恵を育んでくれました。

2. 練習船の生活

水産大学校には、専攻科を含め5年間在学しました。そのうち、練習船での実習期間は合計1年間にも及びます（写真1）。特に4年生と専攻科で経験する遠洋航海では、天体観測（天測「てんそく」と呼ばれ、船の位置を決定するために六分儀で太陽や星などの天体の高度を測定すること。詳しくは第2話を見てください。）を行いながら赤道を超え、8カ国にも及ぶ外国の港を訪れることができました（写真2）。航海の途次には、海洋調査やマグロ延縄実習（実習内容は第5話に詳しく紹介されています。）も経験します。このように、遠洋航海は今まで学んだ知識や學術の集大成であるとともに、船内生活に欠かせない規律や制限を知ることができます。また、知識や技術は一人で学ぶことができても、知恵は人と切磋琢磨することで醸成されることも教えてくれました。



写真1. 練習船「耕洋丸」と記念撮影



写真2. フィジーにて

3. 遠洋航海

遠洋航海では、港から港までの間（航海日数）が2週間以上も続くことがありました。陸地どころか、船とも会わない日が続くことがあります。これも単調な毎日だと思われがちですが、海の景色は毎日変化します。写真3～4は、下関から香港に向かう途中に南シナ海で撮影したものです。澄んだ空気、水平線に広がる美しさは、海の魅力そのものです。課業を終えた実習生は、夕陽の美しさに吸い込まれるように寄港地への思いを馳せ、将来について語り合います。この景色が実習生の疲れを癒してくれます。



写真3. 南シナ海に沈む夕陽



写真4. 雲が陸地のように見える

一方、天測（写真5）や甲板作業、航海当直などの実習は、途切れることなく続きます。太平洋とインド洋で経験したマグロ延縄実習（写真6）には、漁具や漁労機器の入念な準備作業の大切さや、船と漁具の位置を適正に操ること、漁具・漁法の特徴を考慮した漁具投入のタイミングとそれに合わせた操船、海底地形や気象・海象を考慮した行動選択など、実際の漁業現場に必要な要素がぎっしり詰まっています。漁具投入後は、浮子（「アバ」と呼び、漁具が沈まないよう調整する「浮き」のこと。延縄漁具の構造は第5話の図を見てください。）を旋回する操船実習も行われました。



写真5. 天測中の著者



写真6. マグロはえ縄実習の様子

4. 最後に

このように、練習船の実習は限られた空間で行う共同生活を基本とし、24時間体制で動いています。実習中は、いい意味でも悪い意味でも話題に事欠かすことはありませんでした。そんな中、私はプロである乗組員の身だしなみ・行動・判断・指示・しぐさを学び、そして一家の大黒柱としてご家族を支えていることを知り、船乗りに対する「憧れ」を抱くようになりました。

その後、私は民間企業で海上勤務と陸上勤務を経験したのち、現在は水産大学校に勤務しています。私達を育ててくれた練習船は、2隻とも新造船（耕洋丸は平成19年に竣工、天鷹丸は平成29年に竣工）に生まれ変わりました。しかし、練習船での思い出は、20年以上経った今でも昨日の事のように思い出されます。これが経験した者だけが分かる練習船の魅力と魔力なのかも知れません。

（水産大学校 海洋生産管理学科 准教授 松本 浩文）